不妊治療と夫婦・カップルの関係性に関する文献検討

木町　紗邑[1)]，福島　莉乃[2)]，二川　香里[3)]

1）富山県済生会高岡病院
2）滋賀県立大学大学院人間看護学研究科助産学部門
3）富山大学学術研究部医学系母性看護学

要　旨

不妊治療と夫婦・カップルの関係性に着目して文献検討し，不妊治療を行う夫婦・カップルに対する看護支援検討のための基礎資料とすることを目的とした．医学中央雑誌 Web 版を使用し，キーワードを「不妊症」「配偶者」「夫婦」「カップル」「パートナー」として検索した．抽出された 128 件のうち，目的に合致した論文 14 件を分析対象とした．分析の結果，文献数は 1999 年から 2023 年まで各年 0 ～ 2 件で推移し，不妊治療と夫婦の関係性に焦点を当てた研究は少ないことが分かった．不妊夫婦・カップルにおいては妻と夫で抱える思いやストレスが異なり，それに対する対処行動も異なっていたこと，夫婦間のコミュニケーションを促す介入により妻の精神的苦痛が軽減されていたことから，夫婦間のコミュニケーションを促し，夫婦・カップルで互いの思いを理解する関係性を構築できるような看護援助の必要性が示唆された．

キーワード

不妊治療，夫婦，関係性，文献検討

はじめに

本邦において生殖補助医療技術の発展は著しく，世界で最も生殖補助医療技術の実施数が多い国であり，実施数は現在も増加している．令和 3 年度では，治療周期総数が 498,140 件に対し，69,797 人の児[1)]が生殖補助医療技術により誕生しており，これは全出生児 811,622 人の 7.9％に当たる[2)]．そして，令和 3 年度での不妊の検査または治療経験がある夫婦の割合は 22.7％であり，結婚 5 年未満の夫婦の 6.7% が現在不妊に関する検査や治療を受けている[3)]．

これらの背景には，女性の社会進出やライフスタイルの多様化などによる初婚年齢や出産年齢の上昇が考えられる．実際，夫の平均初婚年齢は平成 7 年の 28.5 歳に比べて，令和 4 年は 31.1 歳と上昇しており，また妻の平均初婚年齢も平成 7 年の 26.3 歳に比べて，令和 4 年は 29.7 歳と上昇している[4)]．しかし，女性の妊娠しやすさは，おおよそ 32 歳位までは緩徐に下降するが，卵子数の減少と同じくして 37 歳を過ぎると急激に下降していく[5)]．上記のような背景により，生殖補助医療技術の実施数が増加していると考えられる．さらに，令和 4 年 4 月から人工授精などの「一般不妊治療」，体外受精・顕微鏡受精などの「生殖補助医療」について保険適用が開始された[6)]ことも加わり，今後の生殖補助医療技術の実施数はさらに増加すると考えられる．

不妊治療に関する女性を対象にした先行研究は多く，不妊女性に対する支援は様々な研究で考察されているが，夫婦を対象にした研究は未だに少ない．近年，生殖に関する支援の対象は，不妊治

療を受ける女性のみならず夫婦・カップルと考えて取り組むべきである[7]とされている．そこで本研究では，不妊治療と夫婦・カップルの関係性に着目し，国内文献検討により，研究動向と不妊夫婦・カップルの関係性についてどのようなことが明らかにされているのかを確認し，不妊治療を行う夫婦・カップルに対する看護支援検討のための基礎資料とすることを目的とする．

用語の定義

夫婦・カップルの関係性：結婚状態にある男女，あるいはそれと同等の状態にある男女間に存在するつながりや関連を指し，それぞれに影響を与え合っている状況のこと．

研究方法

1．分析対象論文の選定

対象文献選定のプロセスを図1に示す．文献検索は医学中央雑誌Web版を用いた．本邦では婚姻関係にある男女を「夫婦」というが，近年，婚姻関係にあっても「夫婦」ではなく「カップル」と記載する研究もあり，夫や妻という単語を使用せず配偶者やパートナーと表現する研究もあることから，検索キーワードを「配偶者」「夫婦」「カップル」「パートナー」とし，「不妊症」and「配偶者」or「夫婦」，「不妊症」and「カップル」，「不妊症」and「パートナー」で検索した．文献の条件を原著論文，会議録除く，抄録あり，看護（分類）とし，検索（検索日：2023年3月13日）の結果，128件の文献を抽出した．その内，重複している文献を除外し，タイトルと抄録および本文を確認し，不妊夫婦･カップルを対象としていない文献，不妊夫婦・カップルの関係性に言及されていない文献を除外し，本研究の目的に合致する文献14件を抽出した．また，抽出した文献14件を表1に示す．

2．分析方法

抽出した文献について，雑誌掲載年の年次推移，研究対象者，研究デザイン，研究目的と記述内容について検討した．また尺度を使用した文献では，使用されている尺度を抽出した．研究目的と記述

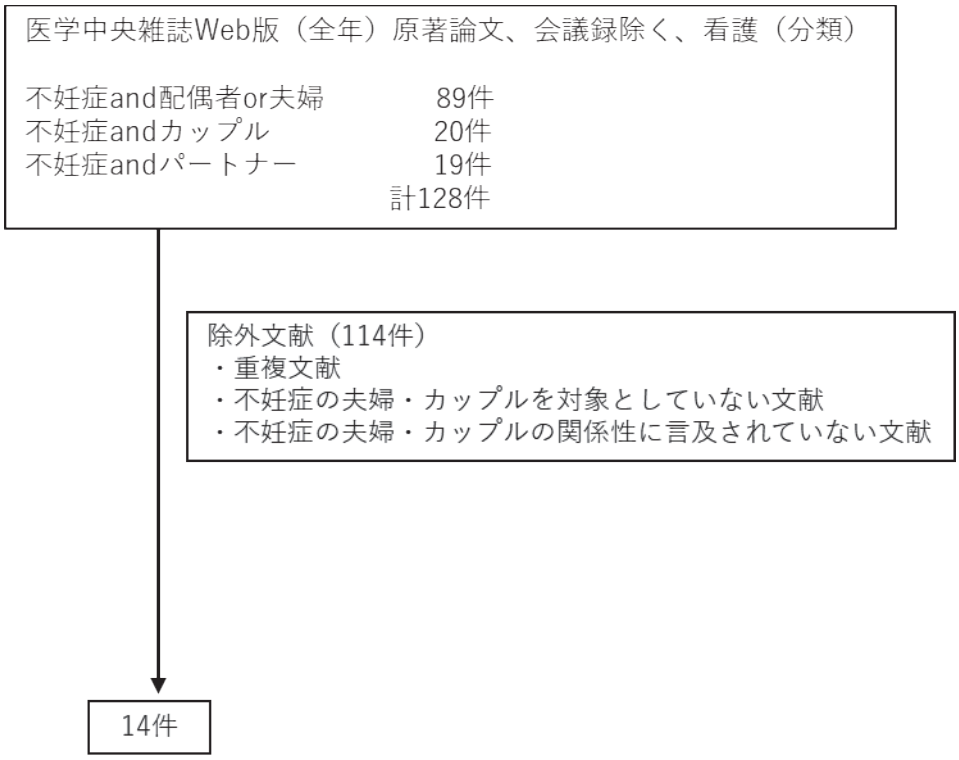

図1　対象文献選定のプロセス

内容については，文献を精読し，不妊夫婦・カップルの関係性について何を明らかにしようとしているのか，加えて，結果として記述されている部分を抽出した．抽出した部分の類似点や相違点に着目し，比較検討した上で，抽象度を上げて統合しカテゴリーとした．研究目的が複数ある文献においては，それぞれの目的にそって記述部分を抽出し分類した．

結　　果

1．掲載年次および研究対象者について

掲載年は1999年から2018年で，1999年に1件，2004年に2件，2005年に1件，2011年から2018年で毎年1～2件の発表があった．

研究対象者の分析を表2に示す．研究対象者は「不妊治療を受けた経験あり」と「不妊治療中」

表1　対象文献一覧

No.	文献
①	野内香純,氷見桂子：不妊治療後第一子の育児期にある夫婦の関係性変容の様相,母性衛生,58(4),557-566,2018
②	中島久美子,荒井洋子,岡崎友香：不妊治療中の夫婦におけるパートナーシップの認識と夫婦関係満足度および妻の精神的健康の関連性,日本生殖看護学会誌,14(1),51-60,2017
③	林はるみ：卵子提供で妊娠した日本人夫婦の経験,日本生殖看護学会誌,13(1),13-20,2016
④	Asazawa Kyoko：Effects of a partnership support program for couples undergoing fertility treatment,Japan Journal of Nursing Science,12(4),354-366,2015
⑤	Asazawa Kyoko, Mori Akiko：Development of a partnership causal model for couples undergoing fertility treatment,Japan Journal of Nursing Science,12(3),208-221,2015
⑥	朝澤恭子:不妊治療を受けるカップルへのパートナーシップ支援プログラムの開発と評価,日本助産学会誌,28(2),154-163,2014
⑦	朝澤恭子:不妊治療を受けるカップルのパートナーシップ尺度の開発　信頼性と妥当性の検討,日本看護科学会誌,33(3),14-22,2013
⑧	本田万里子,上田公代：不妊治療中におけるカップルの親密さと精神健康の関連,日本生殖看護学会誌,9(1),15-22,2012
⑨	野澤美江子:不妊治療を受けているカップルの親密さを高める介入プログラムの開発,日本生殖看護学会誌,8(1),13-21,2011
⑩	林谷啓美,鈴井江三子:不妊治療を受けた就労夫婦の経験と心理　4組の夫婦へのインタビュー調査を基に,園田学園女子大学論文集,45,121-139,2011
⑪	陳東,森恵美：不妊治療を受けている夫婦の対処行動と夫婦関係との関連,日本不妊看護学会誌,2(1),4-11,2005
⑫	野澤美江子：不妊治療を受けているカップルの親密さを測定する尺度の開発質問項目選択のためのプレテスト,日本母性看護学会誌,4(1),38-45,2004
⑬	森恵美,陳東,遠藤恵子：不妊治療を受けている夫婦の対処と適応状態,日本母性看護学会誌,4(1),23-29,2004
⑭	森恵美,折口恵子,遠藤恵子,三隅順子：日本において不妊治療中の夫婦の夫婦関係　妊婦とその夫の夫婦関係との比較から,母性衛生,40(1),168-175,1999

に区別することができ，それぞれの文献数は3件，11件であった．「不妊治療を受けた経験あり」の内訳は，「不妊治療後に初めて出産した夫婦･カップル」が1件，「卵子提供で子供を得た夫婦･カップル」が1件，「不妊治療の経験がある就労夫婦･カップル」が1件であった．「不妊治療中」は，「不妊治療中の夫婦・カップル」が11件であった．

２．研究デザインの分析

研究デザインの分析および使用された尺度を表3および表4に示す．研究デザインは質的研究が3件であり，全てが半構造化面接を用いていた．量的研究は9件であり，介入研究が2件であった．

３．研究目的および記述内容の分析

対象文献の研究目的と記述内容をカテゴリーに分類したものを表5に示す．不妊夫婦・カップルの関係性について明らかになっていることは8カテゴリーに分類された．

１）不妊夫婦・カップルに対する介入プログラムの開発

不妊夫婦・カップルに対する介入プログラムの開発に関する文献は3件であった．生殖補助医療を予定している不妊夫婦・カップルのパートナーシップ向上を目指して，パートナーシップ支援プログラム（不妊治療中の男女の心理状態に関する情報提供，夫婦間での具体的な協力内容の情報提供，夫婦間でのコミュニケーションを促進する演習）を不妊夫婦・カップルに対して介入として実施し，介入群と比較群で効果を検証していた．支援プログラムを受けた方が，女性の精神的身体的苦痛が軽減していた（文献④）．文献⑥では文献④とは異なる不妊夫婦・カップルを対象とし，同様のパートナーシップ支援プログラムを実施してその効果を検証していた．男女間の比較では，男性群に顕著な介入効果はなかったが，女性群で精神的苦悩が緩和されていた．不妊治療中の夫婦・カップルの親密さを高めることを目指した介入プ

表２　研究対象者の分析

対象者		文献件数(件)	文献番号
不妊治療を受けた経験あり	不妊治療後に初めて出産した夫婦・カップル	1	①
	卵子提供で子どもを得た夫婦・カップル	1	②
	不妊治療の経験がある就労夫婦・カップル	1	⑩
不妊治療中	不妊治療中の夫婦・カップル	11	②④⑤⑥⑦⑧⑨⑪⑫⑬⑭

表３　研究デザインの分析

研究デザイン	データ収集方法	文献件数(件)	文献番号
質的研究	半構造化面接	3	①③⑩
量的研究	無記名質問紙調査	9	②⑤⑥⑦⑧⑪⑫⑬⑭
介入研究	無記名質問紙調査	2	④⑨

表 4　対象文献で使用された尺度

尺度	文献件数(件)	文献番号
不妊治療を受けるカップルのパートナーシップ尺度	5	②④⑤⑥⑦
Quality marriage index(QMI)	2	②④
日本版 GHQ 精神健康調査票 12 項目版(GHQ12)	1	②
FertiQoL 尺度	4	④⑤⑥⑦
苦痛尺度（著者自作）	4	④⑤⑥⑦
Distress 尺度	1	⑥
医療従事者によるサポート尺度（著者自作）	1	⑤
パートナー関係に対する満足度（著者自作）	3	⑤⑥⑦
プロセス評価（著者自作）	1	⑥
不妊治療中のカップルの親密さを測定する尺度 37 項目版	2	⑧⑨
日本版 GHQ 精神健康調査票 30 項目版	1	⑧
Self-Esteem 尺度	1	⑪
Marital Adjustment Test(MAT)日本語版である夫婦間調整テスト	3	⑪⑬⑭
Jalowiec Coping Scale(JCS)日本語版	2	⑪⑬
親密さ尺度（著者自作）	1	⑫
日本語版 STAI 状態不安尺度	1	⑬
自尊感情尺度	1	⑬

表 5　研究目的の分析

目的	文献件数(件)	文献番号
不妊夫婦・カップルに対する介入プログラムの開発	3	④⑥⑨
パートナーシップ尺度・モデル開発	3	⑤⑦⑫
不妊治療中の夫婦・カップルのパートナーシップの認識の差異	1	③
不妊治療中の夫婦・カップルの精神健康と夫婦関係	1	⑧
不妊治療中の夫婦・カップルの対処行動と夫婦関係	2	⑪⑬
不妊治療を受けずに子供を授かった夫婦・カップルとの比較からみた不妊治療中の夫婦関係	1	⑭
不妊治療後の夫婦関係の変容	1	①
不妊夫婦・カップルの不妊治療の経験や治療中の心理	2	③⑩

ログラムの開発では，親密さ自己診断プログラムと3か月間の親密さを高めるエクササイズ（夫婦間での感情の共有，ボディタッチを促す等）を実施し，介入前後で夫婦・カップルの親密さを比較していた．介入前後での夫婦・カップルの親密さに変化はなかった（文献⑨）．

2）パートナーシップ尺度・モデル開発

パートナーシップ尺度・モデル開発に関する文献は3件であった．不妊治療中の夫婦・カップルに関するパートナーシップ因果モデルの開発を目的とし，その適合性を検証していた．不妊治療中の夫婦・カップルのパートナーシップは，夫婦・カップルの関係満足度とQOLに影響を及ぼしていた．またパートナーシップには，医療者からのサポートが影響し，サポートがあるとパートナーシップが強化されていた（文献⑤）．不妊治療中の夫婦・カップルのパートナーシップ尺度の開発を目的とし,「精神的サポート」「負担の理解」「治療上の協力」の3因子を下位尺度とした18項目の尺度を作成していた．信頼性および妥当性が検証され，不妊治療中夫婦・カップルのパートナーシップを評価できるとされていた（文献⑦）．不妊治療中の夫婦・カップルの親密さ尺度の開発を目的とし,「接近した関係」「自己表出」「分ち合い」「共に取り組むこと」「大切にされている感覚」「安心」「信頼」「性的満足感」の8因子を下位尺度とした72項目の尺度を作成していた．信頼性と妥当性の検証は今後の課題とされ，臨床での使用が可能な段階までには至っていなかった(文献⑫)．

3）不妊治療中の夫婦・カップルのパートナーシップの認識の差異

不妊治療中の夫婦・カップルのパートナーシップの認識の差異に関する文献は1件であった．不妊治療中の夫婦・カップルにおけるパートナーシップの認識の差異，パートナーシップの認識と夫婦関係満足度および妻の精神健康との関連を明らかにすることを目的とし，質問紙調査が実施されていた．パートナーシップの認識は夫婦間で差異があり，夫は妻をサポートしていると自己評価しているが，妻は夫のサポートを低く評価していた．パートナーシップの認識と夫婦関係満足度では関連があり，夫婦関係満足度が高い妻と夫では良好なパートナーシップであると認識していた．また妻のパートナーシップの認識と精神健康では関連があり，精神健康が良好な妻では良好なパートナーシップであると認識していた（文献②）．

4）不妊治療中の夫婦・カップルの精神健康と夫婦関係

不妊治療中の夫婦・カップルの精神健康と夫婦関係に関する文献は1件であった．不妊治療中の夫婦・カップルの親密さと精神健康との関連を明らかにすることを目的に，質問紙調査が実施されていた．不妊治療1年目の夫婦・カップルの親密さが高ければ,妻の精神健康は良かった(文献⑧)．

5）不妊治療中の夫婦・カップルの対処行動と夫婦関係

不妊治療中の夫婦・カップルの対処行動と夫婦関係に関する文献は2件であった．不妊治療を受けている夫婦・カップルの対処行動と夫婦関係の関連を明らかにすることを目的とし，質問紙調査が実施されていた．夫と比較して，妻の方が治療中のストレスに対して多くの対処行動をとっていた.夫婦共通して「問題の解決を他の人に任せる」,「かっとなったり，恨んだり，ののしったりする」,「他の人に，または他の物事に，やつあたる」,「一人になりたいと思う」といった対処行動と夫婦間調整テスト得点には負の相関関係があり,逃避的,感情的対処は夫婦関係に否定的な影響を及ぼす可能性があることが明らかにされていた（文献⑪）．不妊治療中の夫婦・カップルの対処とその適応状態としての不安・自尊感情・夫婦関係の関連を明らかにすることを目的とし，質問紙調査が実施されていた．妻は夫よりもストレスへの対処行動を多くとり,妻の方が不安は強く,自尊感情は低かった．対処行動のうち，感情的対処（心配する，やけ食いや喫煙，飲酒をする）を多く行うと夫婦関係を悪く認知しやすかった（文献⑬）．

6）不妊治療を受けずに子供を授かった夫婦・カップルとの比較から見た不妊治療中の夫婦関係

不妊治療を受けずに子供を授かった夫婦・カップルとの比較から見た不妊治療中の夫婦関係に関する文献は1件であった．不妊でない夫婦・カップルの夫婦関係と不妊治療中の夫婦・カップルの夫婦関係を比較することを目的とし，質問紙調査が実施されていた．結婚4年未満の不妊夫婦･カップルでは，不妊ではない夫婦・カップルより，自分たちの夫婦関係を悪く認知していた．また不妊治療が3年以上になると夫婦関係が悪化する傾向にあった．不妊夫婦・カップルの妻は不妊ではない妻よりも，今の結婚について後悔を示していた（文献⑭）．

7）不妊治療後の夫婦関係の変容

不妊治療後の夫婦関係の変容に関する文献は1件であった．不妊治療後第1子の育児期にある夫婦・カップルの関係性変容の様相を明らかにすることを目的とし，質的研究が実施されていた．不妊治療後の夫婦･カップルの関係性変容の様相は，「関係発達型」「関係好転型」「関係変化期待型」「関係温存型」の4つに分けられた（文献①）．

8）不妊夫婦・カップルの不妊治療の経験や治療中の心理

不妊夫婦・カップルの不妊治療の経験や治療中の心理に関する文献は2件であった．卵子提供で子どもを得た日本人夫婦・カップルの妊娠期の経験を明らかにすることを目的とし，質的研究が実施されていた．夫の経験は「チャンスを逃さない決断」「意思決定は妻に任せる」「胎児に関心がない素振り」「子供を可愛がってくれるか分からない不安」「腫れ物に触れるような関わり」「卵子提供を受けた倫理性への迷い」「秘密は墓場まで持っていく」の7カテゴリーであった．妻の経験は「最後の治療にするための決断」「子供を可愛がることができるか分からない不安」「流産できない重圧」「胎動のたびに感じる寂しさ」「子供を大切に育てる決心」「倫理性への迷いと支援ニーズ」「秘密は墓場まで持っていく」の7カテゴリーであった（文献③）．不妊治療中の就労夫婦・カップルの経験と心理を明らかにすることを目的とし，質的研究が実施されていた．妻の経験と心理は「職場におけるプライバシーの保持困難」「上司の不妊治療を受ける女性に対する無理解」「上司への気兼ね」「同僚の妊娠出産に対する気持ちの揺れ」「パートタイム労働という選択」などの11カテゴリーがあった．夫の経験と心理は「上司の理解」「受診しやすい環境」「休暇取得しやすい環境へ向けての整備」「職場への気兼ね」「夫婦での仕事の調整困難」などの11カテゴリーがあった（文献⑩）．

考　　察

1．不妊治療と夫婦・カップルの関係性に関する研究の動向

我が国では，女性の社会進出やライフスタイルの多様化などにより，晩婚化や第1子出産年齢の高齢化が進んでいるため，不妊治療の実施数は年々増加している．それに伴い，不妊治療を行う夫婦・カップルに対する関心は高まり，不妊治療の保険適用などの支援の幅は広がっているものの，文献数は各年0～2件で推移しており，1999年～2022年の24年間で大きな変化はみられなかった．今回の対象文献の中でも不妊治療中は夫よりも妻の方がストレスを抱えやすいとしていた文献が多く，不妊に関する看護研究は夫婦・カップル単位ではなく，女性を対象とした看護援助を検討する研究が多くなる要因のひとつであると考える．

研究デザインは質的研究と比較して量的研究が多く，データの収集方法としては無記名質問紙調査が最も多かった．これは簡易的かつ広範囲に実施できるものであるため，より多くのデータを収集することができる．また数値で把握するため，得られたデータの関連を把握しやすい．さらに，不妊治療や夫婦関係といったセンシティブな問題を取り扱うため，無記名質問紙調査にすることでプライバシーへの配慮がなされ，心理的に回答しやすく，多くのデータを集めることが可能であったと考えられる．一方，量的研究と比較して質的研究は3件と少なかったが，不妊夫婦・カップルの関係性や不妊治療における経験および心理の本質を明らかにするために用いられていると考えら

れる．量的研究は一般的法則をつくることを目的としているが，質的研究は個別事例において観察された事象から物事の本質をとらえることを目的としている[8]．不妊夫婦・カップルの関係性や親密さ，ニーズなどは個別性が高い一面もあり，それらの本質を明らかにして対象の理解を目的とする際には，質的研究は有用であり，種々の研究手法を用いた研究が必要であると考える．

対象文献における研究目的は，不妊夫婦・カップルに対する介入プログラムの開発についての文献が3件であった．これらの文献は夫婦・カップルのパートナーシップ向上を目指した介入の開発を目指しており，全てにおいて介入の中に夫婦・カップル間でのコミュニケーションを促すための講義や演習を取り入れていた．このことから，不妊夫婦・カップルの夫婦関係を良好に維持するためには，夫婦・カップル間で治療中の互いの思いを理解し共有し合うことができる関係性の構築が必要であると言える．また，パートナーシップ尺度・モデル開発についての文献も3件であった．不妊夫婦・カップルに限らず夫婦の関係性は個別性が大きく一般化するのは難しいと考えるが，不妊夫婦・カップルの関係性の特徴を客観的に評価するツールを使用することで，夫婦関係の一面を捉え援助に活用できる可能性があると考える．

２．不妊夫婦・カップルの関係性における問題点と看護援助について

不妊治療を受けずに子供を授かった夫婦・カップルとの比較から見た不妊治療中の夫婦・カップルの関係の文献では，不妊治療中の夫婦・カップルの夫婦関係調整テストの平均点が有意に低かった（文献⑭）．このことから不妊でない夫婦･カップルよりも不妊治療中の夫婦・カップルの関係は悪化しやすいと考えられる．

不妊夫婦・カップルの不妊治療の経験や治療中の心理に関する文献では，不妊治療中の夫の経験や心理として「腫れ物のような妻への関わり」（文献③）や「職場への気兼ね」，「妻を支えるプレッシャー」，「経済的不安」（文献⑩）など，また妻の経験や心理としては「流産できない重圧」（文献③），「上司への気兼ね」，「同僚の妊娠出産に対する気持ちの揺れ」，「経済的不安」（文献⑩）などが挙げられた．不妊治療という経験は夫婦それぞれの治療や治療結果に対する思いがあり，仕事と治療の両立や経済面など様々な面で不安やプレッシャーなどの精神的負担を抱えていると推察できる．また，不妊治療中の妻の精神健康（GHQ）と夫婦関係に関する文献を見ると，GHQの下位尺度の「希死念慮とうつ傾向」，「身体症状」で男性と女性間では女性の得点が高く（文献⑧），女性の方が精神健康は悪い傾向にあった．女性ではGHQと治療年数の間には有意差があり，治療1年目の女性は2年目以上の女性と比較してGHQ総得点が高く（文献⑧），不妊治療開始から1年以内の女性たちは不妊や治療に対して悩みや不安が多いことが考えられる．加えて，不妊治療は不妊原因に関係なく女性が頻回に通院し身体的苦痛を伴う治療を行う必要があること，不妊という問題は「女性の問題」と見なされる傾向が社会通念としてあること[9]から不妊治療は身体的･精神的･社会的に女性に負担が大きいものであり，GHQ得点にもその結果が反映されていると考える．不妊治療1年目の女性のGHQと夫婦の親密さには有意な負の相関がみられた（文献⑧）ことより，不妊治療1年目の女性の精神健康をより良くするためには夫婦・カップルの親密さを高める看護ケアが必要であると考えられる．また，親密さ尺度の「自己表出」では，女性より男性の方が低かった．男性の中でも自己表出が高いほど親密さも高く正の相関があった（文献⑧）．このことから男性は女性に比べ自己表出が少なく，心に秘めた気持ちを十分に妻に伝えることが出来ておらず，妻が治療に対する男性の思いを知ることが難しい状況にあると考えられる．このことから，夫婦･カップルの親密さを高めるためには，男性の自己表出を促すコミュニケーションスキルの獲得と男性が自己表出しやすくなるような女性のコミュニケーションスキルの獲得に対する看護支援の必要性があると考える．

不妊夫婦・カップルに対する介入プログラムの開発に関する文献からは，レクチャーや参加型演習などによる介入プログラムの実施が夫婦・カップルにとって，パートナーへの〈理解の深まり〉

や〈安心感〉,〈コミュニケーションに役立つ〉,〈情報獲得〉などニーズの充足に繋がっていた（文献⑥）．介入プログラムでの情報提供はパートナーの理解に繋がり，さらに医療者の適切な支援は夫婦間のコミュニケーションを円滑に進める一助となっていると考えられる．これらのことからも，夫婦間でのコミュニケーションやその両者が自己表出を十分に行えるような医療者の看護援助が必要であると考える．

結　　語

対象文献は14件であり，文献数は1999年から2023年まで各年0～2件で推移し，不妊治療と夫婦関係の関連に焦点を当てた研究は少ないことが分かった．研究デザインは質的研究が3件，量的研究が11件であった．研究目的は8つのカテゴリーに分類された．不妊夫婦・カップルにおいては妻と夫で抱える思いやストレスが異なり，それに対する対処行動も異なっていたこと，夫婦・カップル間のコミュニケーションを促す介入により妻の精神的苦痛が軽減されていたことから，夫婦・カップル間のコミュニケーションを促し，夫婦・カップルで互いの思いを理解する関係性を構築できるような看護援助の必要性が示唆された．

利益相反

利益相反自己申告：申告すべきものなし．

引用・参考文献

1）公益社団法人日本産婦人科学会：登録・調査小委員会ARTデータブック2021年体外受精・胚移植等の臨床実施成績，https://www.jsog.or.jp/activity/art/2021_JSOG-ART.pdf（参照2023-9-25）

2）厚生労働省：令和4年（2022）人口動態統計月報年計（確定数）の概況，https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei22/dl/15_all.pdf,（参照2023-9-25）

3）国立社会保障・人口問題研究所：第16回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)現代日本の結婚と出産－第16回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書－，https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16_ReportALL.pdf,（参照2023-9-25）

4）厚生労働省：令和4年（2022）人口動態統計月報年計（概数）の概況，https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/index.html,（参照2023-9-25）

5）公益社団法人日本産婦人科医会：1. 妊娠適齢年令，https://www.jaog.or.jp/lecture/1-%E5%A6%8A%E5%A8%A0%E9%81%A9%E9%BD%A2%E5%B9%B4%E4%BB%A4/,（参照2023-10-02）

6）厚生労働省：不妊治療に関する取組 ,https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-hoken/funin-01.html,（参照2021-9-25）

7）阿部正子：体外受精の受療にかかわる夫婦の意思決定状況－妻の認識している夫のかかわりとそれに対する妻の思いに焦点をあてて－．周産期医学35（10）：1389-1393，2005.

8）横山美江：看護研究の基礎知識．よくわかる質的研究の進め方・まとめ方看護研究のエキスパートをめざして，グレッグ美鈴，麻原きよみ，横山美江編著，pp3，医歯薬出版，東京，2007.

9）盛岡由起子，千葉ヒロ子，森恵美：不妊症女性患者の心理と対応．ペリネイタル・ケア新春増刊2001：70-83，2001.

Literature review on infertility treatment and marital relationships

Sayu KIMACHI[1)], Rino FUKUSHIMA[2)], Kaori FUTAKAWA[3)]

1) Social Welfare Organization Saiseikai Imperial Gift Foundation inc Saiseikai Takaoka Hospital
2) Midwifery, Graduate School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture
2) Maternity Nursing, Faculty of Medicine, Academic Assembly, University of Toyama

Abstract

The purpose of this study is to review the literature on the relationship between infertility treatment and the relationship between couples, and to provide basic information for considering nursing support for couples undergoing infertility treatment. The Ichushi-web was used to search for the keywords "infertility", "couple" and "partner" of the 128 articles extracted, 14 articles that met the purpose were analyzed. The analysis showed that the number of articles varied between 0 and 2 articles per year from 1999 to 2023, and there were few studies that focused on the relationship between infertility treatment and marital relationships. In infertile couples, the thoughts and stress of the wife and the husband were different, the coping behavior of stress differed between the husband and wife, and the wife's mental distress was reduced by interventions that promoted communication between the husband and wife. It was suggested that there is a need for nursing support that promotes communication between husband and wife and builds a relationship in which couples can understand each other's thoughts.

Keywords

infertility treatment, couple, relationship, literature review